2025年2月26日・28日　水曜祈り会・金曜集会　　吉田真司

本日の学び　　テーマ:「七の七十倍」　テキスト:マタイ18章21節-35節

【理解の手がかりとして】

このたとえ、マタイによる福音書にのみある話。幼心からとても印象に残してきたたとえ。※たとえ本文は 23～34 節部分。その内容は、自分は途方もないほどの負債をゆるしてもらいながら、その何十万分の一ほどの額のお金を貸していた仲間に出会うと、無情にも牢にたたきこんでしまったという人の話。

自分は、どれほど人の世話になっているか分からないのに、他の人に対してはやたらに厳しい私たち人間の現実…誰しも身に覚えのあるところ。

このたとえに登場する「ある王／主君」は、そのまま「神さま」と見て良いだろう。そして「家来」は私たち「人間」。家来が王から借金していた「一万タラントン」とは、高額どころの程度ではない。当時の社会で言うと、ユダヤ全国がローマ帝国へ治める税金総額が 800 タラントン。つまり単純に見ても「一万タラントン」は 10 数年分の一国の納税額。

一方、「百デナリオン」はどれほどのものか。労働者の 100 日分（三ヶ月分）ほどの給料と考えても良い。決して安くはないが、私たちの想像しうる、そしてある意味切実で現実感のある金額である。この金額の違いをよくよく前提として、たとえ話を読もう。そもそも「一万タラントン」とは、一個人（一家来）に返済できる額なのか？家屋敷を全て売って返せるほどのものなのか？…「否」である。一方、「百デナリオン」は、返そうとすれば可能な額である。

では、このたとえがどのような時に語られたかを考えてみよう（→21 節）。ここにペトロが登場する。彼は弟子群の代表（その後の教会の代表者）である。つまりイエス様は「弟子たちに」、さらには「教会に向かって」教えておられる、ということである。

「兄弟がわたしに対して罪を犯したら、何回赦すべきか」とペトロは問う。さらにペトロは「七回までですか？」と問う。…実際、私たち人間は、「わたし（自分）に対する罪」というものは赦し難い、いやもっと正直に言えば赦せないもの。

ユダヤ教の経典の中にこういう話があるそう。「『鎌を貸してくれ』とある男が言った。相手は『いやだ』と拒絶した。しばらくして逆にその拒絶した男が『馬を貸してくれ』と言ってきた。すると彼は『おまえは鎌を貸してくれなかったから、おれは馬を貸さない』と答えた。これは『復讐』である。…『鎌を貸してくれ』とある男が言った。相手は『嫌だ』と拒絶した。しばらくして、その拒絶した男が『馬を貸してくれ』と言ってきた。初めの男は馬を貸してやったが、貸すときに『あなたは貸してくれなかったが、私はあなたに貸してやる』と言った。…これは『憎悪』である。」（清水恵三著『イエスさまのたとえ話』より）

この話は、私たち人間の複雑な感情と行動の一部を映しているように思う。行動では美しく善処しても、内心にとどまるものは混濁している、そういう現実を、である。

あらためてペトロの「七回までですか？」という問いを考えてみる。「7」は完全数。つまり「それほど完全に」という意味である。果たして、そんなこと人間に出来るのか。…しかし、イエス様は桁外れな、ペトロの、人間の想像（最大限の善意）を超える答えを為される。「七回どころか七の七十倍までも赦しなさい」…単純に 490 回ということではない。「完全」に「完全」を尽くしなさい、というのである。…この桁外れの答えと、先の「一万タラントン」という桁外れの借財が重なり合う。

はなしをたとえに戻すと…主君は家来を呼びつけて裁きが行われる。内容としては神様の裁きの映しである。家来自身が赦された借財に比べればほんの一部でしかなかったものを赦さなかった彼に裁きがくだされる。

その判決は「無期懲役」である。なぜなら、一生掛かっても返済しえない借金だから。

そして最後に、裁きの締めとして次なる言葉が告げられる。「あなたがたの一人一人が、心から兄弟を赦さないなら、わたしの天の父もあなたと同じようになさるであろう」。…ここにある「心から」という言葉が、先のユダヤ経典の話「憎悪なき赦し」と重なる。…しかし、先に言ったように、それは本当に難しい、人間の現実の感情は、そう割り切れるものではない。

そのような人間の現実を踏まえつつ、しかしそこに留まらせない、…このたとえはそういう招きのように感じる。すべては主君の「憐れに思って」（18:27）から始まっていること。これは尋常ではない赦しだということ、このことから出発しよう。

想像を絶する赦しの恵みを与えられた。それゆえに赦し合いなさい、という招きである。「恵みへの応答」である。神の赦しの恵みが与えられたという確固たる事実の上に生きる時、人はその恵みのかけらを分かち合う（赦し合う）、そういう生き方へと招かれている。

「恵みの赦しというのは、私たちを、ゆるし得ない現実へと投げ返す力を持っているのではないでしょうか。繰り返し繰り返し赦しへの恵みへと引きつけながら、同時に、赦し得ない私たちの現実へと激しく投げ返し、たたきつける力を持っているのです。」「赦すことについて、自分が無力であることを知って、赦すことを断念するのでなく、赦しについて、自分が無力であると断念することを断念させるのが、主イエスによる赦しの恵みの力ではないでしょうか」（上掲書）―――この言葉を読み、あらためてキリスト者の生活とは「十字架と復活」によって立てられるのだと思う。すなわち、断念ではなく、あきらめない希望、である。

【聖書教育より】

「このたとえから神の思いを聞きたいと思います。それは寛大な神の愛です。…教会は、このペトロのようにイエスさまの天の国のたとえから神さまの思いを共に学び、共に生きるのだと思います。」（聖書の学び～神の愛の寛大さ）

「ペトロは、イエスの受けた深い傷を目の当たりにした時に、ようやく自分がどれだけ赦されなければならない存在なのかが分かったのではないでしょうか。」（大人クラス）